


2010年度

第8回「日本語体験コンテストin上海」 実施報告


開催日時 2010年10月17日（日）9：30～17：30

場 所 中華人民共和国上海市 甘泉外国語中学校講堂

主 催  一般財団法人 共立国際交流奨学財団
東京本部・上海委託事務所

後 援 文部科学省
在上海日本国総領事館

全日本空輸株式会社 上海・杭州支店

協 賛  株式会社 共立メンテナンス

実施概要

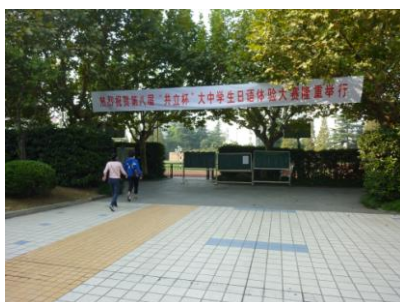
本年度で8回目を迎える同コンテストが2010年10月17日（日）、上海市甘泉外国語中学にて開催されました。予選会の参加者は高校生66名、大学生71名の合計137名が集まりました。予選会は高校生・大学生に分かれ、同一の予選問題（日本の時事、文化、歴史などについての選択クイズ）を解くという形式で行われました。予選通過者は高校生12名、大学生16名の合計28名でした。

本選会では、会場で発表される三つの課題から一題を選択し、制限時間3分の即興スピーチを行いました。

審査委員の先生による審査の結果、入賞者8名（高校生4名、大学生4名）が選ばれ、審査委員長から入賞状と賞品である「日本体験旅行（5泊6日）」の目録を授与されました。

日程

	時 間	内 容
予選会	09：30～09：35	予選会開始
	09：35～09：40	注意事項説明
	09：40～10：20	筆記試験
	10：20	予選会終了
本選会	13：00～13：05	開会の辞
	13：05～13：15	予選通過者発表
	13：15～13：20	審査委員紹介
	13：20～13：50	注意事項説明、スピーチ準備
	13：50～16：00	スピーチコンテスト開始
	16：30～	授賞式：「共立賞・日本体験旅行」受賞者発表



予選会



本選会



入賞者

	氏名		学校名
1	李 孝文	リ コウブン	中華東師範大学
2	沈 彦君	チン ゲンクン	南通大学
3	彭 晓培	ボウ ギョウバイ	上海大学
4	沈 震乾	チン シンカン	上海外国語大学
5	邵 思泓	ショウ シコウ	上海外国語大学附属外国語学校
6	吴 桐	ゴ トウ	南京外国語学校
7	潘 婷	ハン テイ	甘泉外国語中学
8	王 雨飞	オウ ウヒ	甘泉外国語中学





審査委員長 皮 細庚(上海日本学会常務理事)

共立国際交流奨学財団と上海市甘泉外国語中学校の共催による「第8回日本語体験コンテスト in 上海」はさる10月16、17日に上海市甘泉外国語中学校で開かれ大成功を収めましたことを、心よりお喜び申し上げます。今回のコンテストの審査委員長を務めさせていただきましたことをたいへん光栄に存じます。

このコンテストについて私がまず申し上げたいのは、やはり他の日本語スピーチコンテストに比べて、二つの大きな特徴があるということです。

一つの特徴は、このコンテストに一日目の筆記試験があることです。筆記試験は予選として行われ、より多くの高校生、大学生が「日本語体験コンテスト」に参加できるようになっています。そして、筆記試験の最も評価すべきところは試験の内容です。日本の社会、地理、物産、生活、スポーツ、教育、流行、方言、文化、歴史、政治、経済、貿易等等、さまざまな内容が織り込まれています。これはまさに「日本を知る」というコンテストのモットーにふさわしい内容です。試験は、難しさを追求するのではなく、日本について「知ってほしい・知ったほうがよい」といったような内容が基調となっているようです。今年は特に印象に残るのは、「日本の現在の総理大臣」「今の日本の二番目に人口の多い都市」「関西地方で“ありがとう”の代わりに言う言葉」「日本では義務教育はいつまで」「日本にある世界一古い木造建築」「日本で救急車を呼ぶ電話番号」などです。出題の方々のご苦心とまじめな態度、両国の相互理解に期待をかけている心遣いが伺われています。私は日本語教育に携わる一人の教師として、共立財団の方々のご努力に心から感謝申し上げます。

コンテストのもう一つの特徴はやはり高校生と大学生が同じ舞台に立って日本語をスピーチすることです。コンテストの目的は、「日本を知る」人材の養成を中学時代から支援しようとするのと、大学で日本語を専攻する大学生に対しても大きく刺激を与えようとするのだと思います。今年も相変わらず高校生の元気なスピーチが印象に残りますが、大学生の落ち着きぶり、表現力のアップが例年より一段と勝るように感じられます。これは本当に嬉しいことです。また、今年は12名の高校生と16名の大学生はいずれもきれいな発音と正しい表現でスピーチしたのが嬉しいことです。選手たちの日ごろの努力と各学校の先生たちの指導の結果だと言わなければならないが、日本語教育全体のレベルアップも感じられます。

今年もすばらしいコンテストがありました。共立財団主催のコンテストの今後の継続ををお願いすると同時に、中日両国の世代間の友好に有志する日本の友人の皆様が中国の日本語教育に対するご支援を今後も続けていかれることを心からお願いしております。



審査委員 佐井 浩然(一般財団法人 共立国際交流奨学財団 理事)

「日本語体験コンテスト in 上海」は今年で第8回を迎え、今回スピーチコンテストの規模、参加人数、学生のレベルなどすべてにおいて例年を超え、実りある盛況で幕を閉じることができました。ご尽力頂いた関係者の皆様に感謝の意を申し上げます。

今回のコンテストには、上海市だけではなく、南京、南通からも大勢の日本語を勉強している高校生と大学生が参加しました。予選会では、日本語と日本社会・経済・文化風習に関する問題を30問課し、約140名の参加者の中から28名の学生が一次予選を通過して、本選会に出場となりました。本選会では、①「もし私が日本に行ったら是非体験してみたいのは……」、②「もし私が日本人と同じ部屋に住むことになったら……」、③「もし私が日本でビジネスを始めるとしたら……」という3つの題が出され、15分間で自らの考えをまとめて発表してもらいました。発表者の多くは課題を正確に把握し、素晴らしいスピーチを聞かせてくれました。学生の日本語表現力とスピーチ能力の高さに驚嘆しました。誰を入賞にするかは、採点には本当に苦労しましたが、最終的には8名の学生が入賞しました。

全体的に見ると、文法と文章力においては大学生のほうが数段上ですが、発想力と表現力においては高校生のほうが優れていました。いずれにしても、短時間で自分の考えをまとめ、大勢の前でスピーチできる力に改めて目をみはられるものです。

回を重ね、参加学生、参加学校が増加し、嬉しい限りですが、その分、この日本語体験コンテストの意義、役割を考え身の引き締まると思います。これからも日本を理解し、日本文化を勉強する学生が増え続けることを期待しております。



審査委員 赤山 小雪(一般財団法人 共立交際交流奨学財団)

日新アカデミー日本語学校 教員)

昨年に続き、審査員を務めさせていただき、非常に良い経験になりました。

本年は例年以上に聞きごたえのある、レベルの高い闘いになったと思います。

昨年の講評では気になる点、もう少し注意してほしいところについて述べましたが、今回は審査してみて上手に聞こえたのはどんなスピーチだったか、具体的に分析してみようと思います。というのも、やはりいいスピーチが聞きたいですし、スピーチの良し悪しは必ずしも学習歴や日本語能力試験の級に比例していないからです。

一つ目は、専門分野があること。

二つ目は、情報に敏感なこと。

三つ目は、自分自身の体験や考えに基づいて話すこと。

一つ目は、おそらく一番大切なことになるかと思いますが、自分の興味のあることについて詳しく知っておくことです。パンフレットの参加者名簿に日本で何が勉強したいかという項目があり、アニメ、伝統文化、食生活など、皆さんが日本の様々なことに興味を持っていることがわかります。それについて、皆さんはどのくらい知っているのでしょうか。たとえばアニメが好きな人は、日本の代表的なアニメを10以上知っていますか。最近のアニメだけでなく、昔のものも知っていますか。日本のアニメと中国のアニメを比較して違いを考えたことがありますか。「興味がある」分野については、オタクだといわれるぐらい詳しくなってほしいと思います。その点で大学生はすでに専門分野を持っているのでスピーチに深みがあります。もちろん、これは大学生の特権ではなく、高校生の皆さんでも興味を追究すれば自ずと自分の専門分野ができ、専門分野ができればどんなテーマでも応用が利くのだと思います。

二つ目は、情報に敏感なことです。予選会を通過者の皆さんはもう十分に日本事情に通じているとは思いますが、インターネットで世界中の情報がやり取りされる時代、知識を常に取り入れて、最新の状態にしておく必要があるのではないのでしょうか。

三つ目は、自分自身の体験や考えに基づいて話すことです。たとえば日本料理について話すなら、一般的なこと（日本料理は味が薄い、魚をよく食べる、健康的だ等々）だけでなく、どんなものでもいいから実際に食べたことのある日本料理について具体的に言及してほしいと思います。日中両国の友好のような大きな視点も確かに重要ですが、無理に話を大きくするより、身近な体験を基にして自分の言葉で語られるスピーチのほうが、聞いていて伝わってくるものがあります。

以上、審査員としてよいスピーチのポイントを考えてみました。

日本を訪れたことのない学習者の皆さんが、将来一人でも多く日本の地を踏んでくれることを願っています。



審査委員 黒澤 志奈(一般財団法人 共立交際交流奨学財団)

日新アカデミー日本語学校 教員)

今回初めて当コンテストの審査委員を務めさせていただきましたが、私が最も印象に残っていることは、多くの方の熱意です。私達がコンテスト前々日に会場視察をした時、ちょうど会場では予選会の練習真っ最中で、生徒はもちろん先生方も真剣に取り組んでおられていて、今回のコンテストに備えての意気込みが感じられ、驚くとともに大変嬉しく思いました。

当日の予選会では、歴史から流行、方言の問題まで幅広い知識が要求され、単なる付け焼刃では正答できない問題も多く、「難しかった。」という声も聞かれたものの、参加者の日本に対する関心度の高さが表れる結果が出ていたのではないのでしょうか。

また当コンテストの本選会は、提示された三つのテーマの中から一つを選んで15分でスピーチを組み立てるというスタイルで、何日もかけて原稿を作り上げ、繰り返し練習を重ねるスピーチコンテストしか知らない私にとっては、非常に新鮮な経験でした。外国語で3分という時間制限の中、かつ自分が主張したい事を論理的に述べることを要求されるスピーチは、大変聞きごたえのあるもので、参加者のテーマも「人気アイドルのコンサートを体験したい」や「日本特有のクラブ活動をして総体に出場してみたい」という若者らしい元気いっぱいなものから、中国版歴女の「沖田総司と桜について」のスピーチ、ナルトやちびまる子ちゃんなどの「アニメからみた日本」や、「被爆地の広島を肌で感じてみたい」「本

当の中国料理を日本に紹介したい」「日本の環境意識の高さについて」など、多岐にわたる題材で、興味深く聞かせてもらいました。

その中でも、ある一人の参加者の「日本人と一緒に生活できたら、誤解を解くためにも、あえて政治問題について深く語り合いたい」という熱のこもったスピーチに、年齢を重ねていくほどについ臆病になってしまう、真正面からぶつかって相互理解を深めていく姿勢の重要さに改めて気付かされました。今回のコンテストのような活動が長く続いていくことで、日中のみならず世界中との架け橋の手助けが出来ればと、改めて当コンテストの意義を思い返しています。

この場をお借りして、このような貴重な機会を与えてくださった方々に感謝するとともに、みなさんの情熱が素晴らしい功績として残る日が来ることを心より願っております。



審査委員 張 国強(中国教育学会外語教学專業委員会秘書長・日語部顧問)

多くの日本の企業は上海周辺に集中しており、上海に住んでいる日本人は5万人以上いるそうである。それで、上海での日本語教育は中国のほかの地域よりも盛んに行われている。隣の国の日本の言葉と文化に興味を持っている人（児童、生徒、学生、社会人）は年々に多くなっている。これは大変素晴らしいことだと、わたしは深く認識している。

日本の多くの文化団体・共立国際交流奨学財団のような一般財団法人・日中友好協会などは、色々な活動を通して、より多くの中国人に身近な国の日本の本当の姿を知ってもらおうと努力している。

でも、時代が変わった。この数年来、自ら日本語をもっと勉強したい、自分の目で日本の良さを見たい、草根の交流をしたい、日本の国民の一人一人と話をしたいという中国人がどんどん増えている。日本語教育の用語で言えば、「受身型」から「主動型」に変わったことに、「第8回 日本語体験コンテスト in 上海」の発表者のスピーチで、わたしはよく分かったと同時に、共立国際交流奨学財団の努力も実ったと、しみじみ感じた。

クイズ形式の筆記試験は、中国人の高校生・大学生にとってはちょっと難しいのではないかなと思う。出題するとき、難易度・一般的な社会事情・高校生と大学生の視野・学習欲の刺激なども考えてもらいたい。また、日本語教育との繋がりも重要視してほしい。

次のような問題はどうか。

例：

日本人の高校生は、日本のサッカーチームを応援するとき、次のどの言葉を使いますか。

- ①頑張ってください ②頑張きなさい ③頑張りましょう ④頑張れ

このような問題は応募者に知ってもらうだけでなく、応用させることもできるようになる。

スピーチのテーマは三つだが、大変いいテーマである、わたしは思う。身近なこと・想像できること・話しやすいこと・使用する文型と単語を既習したことなどがスピーチの大成功の原因ではないかと、発表者が大きな進歩を取っているのではないかと、思う。

日本語を教えるとき、言葉の知識・応用能力と文化理解を平行にしなければならないという認識を持っていなければ、本当の日本語教育とは言えない。

中国と日本の明るく楽しい未来のために、言葉教育と文化交流、特に両国の若者の相互理解を深めて、理解し信頼を強めることは、われわれがすべきことである。

これからも日本語教育・中日友好のためにもっと力を入れて頑張っていく。